りびんぐらいぶず　令和2（2020）年8月第3号

本願を聞くのか讃嘆の名号を聞くのか

◆ご讃題

◆十方恒沙の諸仏如来は、みなともに無量寿仏の威神功徳の不可思議なるを讃歎したまふ。あらゆる衆生、その名号を聞きて信心歓喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向したまへり。かの国に生まれんと願ずれば、すなはち往生を得、不退転に住せん。　**（Ref 仏説無量寿経　巻下　註釈版聖典 p41）**

◆はじめに

『仏説無量寿経』（下巻）の御言葉により十方恒沙の諸仏如来が**無量寿仏の不可思議なるを讃嘆したまふと明かされ、讃嘆の名号をお聞かせに与る**ところからあらゆる衆生が信心歓喜し、お救いに与るのだと頂戴することができます。

一方で、親鸞聖人の『一念多念文意』の御言葉により第十七願は、名号成就の願と云われ、同成就文には、其れが成就されたのだと云われて参りました。

『一念多念文意』の第二条には「聞其名号」といふは**本願の名号をきく**とのたまへるなり。と仰せになり、続いてきくといふは、本願をききて疑ふこころなきを「聞」といふなり、と仰せになっているからです。

それ故、第十七願成就文は「名号成就の願」であると同時に、成就されたお名号をお釈迦様が人間世界で初めて讃嘆なさった「讃嘆の名号」を七高僧を通じてお聞かせに与ることによって現に衆生がお救いに与る働きを明らかにされた御文であります。

改めて両者を頂戴しますと

『仏説無量寿経』(下)の名号讃嘆が「なんと素晴らしいことか」と豊かな表現の幅を持つのに対して、『文意』は「きく」という無疑心の論理表現に傾きます。

お念仏は讃嘆／懺悔であり（『銘文』p655）、讃嘆の衆生が安心する姿だったのです。

数年前、当院をお訪ねになった四十代の若者が、自分自身の人生を振り返ると今ひとつであった。時は秋の三連休、足の向くままに貴院をお訪ね致しました。ふと気がつけば貴院の掲示板の法語に見入っている自分に気がついたのです。法語というのは滋賀組仏教婦人会のご法語そのものです。

ついては、ご本尊を拝まして欲しいと住職にご要望になりました。

「どうぞどうぞ」と申し上げると、それは丁寧にご本尊にお参りになった後、つかつか

と住職の前にお進みになり、「浄土真宗にはどんな利益がありますか」とお訪ねになったのです。私は驚きました。

浄土真宗の信心は信益同時ですから、信心獲得しておれば既に解決済みであるのに、ご常教の「信心正因 称名報恩」では信心は大切だと承ってはいても、その信心を体験的／実践的に獲得できていなかった証拠となるお訊ねだったからです。

お念仏し聞こえて下さるお喚び声をお聞かせに与り、これこそ如来様のお喚び声でございましたかと安心する姿は「聞即信」そのもののお言葉だったからです。

本願が成就すれば、本願力＝名号が招来されるのであり、六字釈に「願力を聞くによりて報土の眞因決定する時剋の極促を光闡するなり」と仰せ下さってもいるからです。「聞即信」そのもののお言葉です。

名号成就は阿弥陀如来のご本願の成就によるのであり重要ですが、衆生は、お釈迦様から七高僧、最後は父母によって伝えられたその働きによってお救いに与るのです。

でも、第十七願、同成就文には経典のお言葉として「讃嘆の名号」が示されている以上は、不肖は、親鸞聖人ご自身の人間親鸞の有り難い「讃嘆の御文」をお聞かせ戴きたかったのです。

◆讃嘆の御文をどうお聞かせ戴くか

梯 實圓和上の『親鸞教学の特色と展開』「本願念佛の伝承」「歎異抄第二条」の「弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。仏説まことにおはしまさば、善導の御釈虚言したまふべからず。

善導の御釈まことならば、法然の仰せそらごとならんや。法然の仰せまことならば、親鸞が申すむね、またもってむなしかるべからず候ふか・・・このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからいなりと云々」との善導大師の**「就行立信釈」**→法然聖人の**「三選の文」**に続く親鸞聖人のご述懐が最も説得力があると窺われるのです。

衆生は、第十八願の「乃至十念」は、梵語の「Anusmareyus」の「随念」ですからお念仏は繰り返し頂戴することができます。お念仏を繰り返し頂戴するうちには、釈尊以降随念して称えてきた衆生の念仏こそが終に、「本願招喚の勅命」を伝える「聞名」に通じることが知られるのであります。

信文類序の最初には、「信心を獲得することは、如来選択の願心より発起す、真心を開闡（かいせん）することは、大聖(釈尊)矜哀の善巧より顕彰せり」とあるのに、敢えて「欲生」の解説を開けておかれるのは,最後にとうとう如来様の仰せの通りに、お浄土へまいらせて戴きたいと願う衆生の「欲生」のために明かしておいて戴いているのに相違ないと窺われることであります。

『尊号眞像銘文』第二条の、『往覲偈』の「聞名欲往生」の御自釈は、そのことを物語っているのに他ならないと思われることであります（註釈版Ｐ645）。

御自釈によれば、まず「欲往生」といふは、安楽浄刹に生まれんとおもへとなりですから、「わが国お浄土に生まれてくるんだよ」というのが如来様の大悲のお心であると頂戴することを意味します。

次に、「御ちかひのみなを信じて生まれんとおもふ人は、みなもれずかの浄土に到ると申す御ことなり」とありますから、如来様のちかひを信じて「如来様のお心の通りに浄土に参らせて戴きましょう」と思う人は、例外なく浄土往生が叶うのであると仰せ下さって居るのであります。合掌。

◆仏教壮年会お聴聞の会八月二日(日)二十時より、　九月六日（日）二十時より
◆正覚寺歓喜会　八月二十二日(土）十時より
◆正覚寺彼岸会　九月十九日（土）十四時より、十九時半より

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内）〒520-0501 大津市北小松四五二番地
TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥